

高田藩記録目録解題

高田藩記録は、現在、上越教育大学附属図書館が所蔵する、近世末期の越後高田藩で作成された文書である。

昭和60年(1985)年7月に、国文学研究資料館が上越教育大学付属中学校で、マイクロフィルムに撮影した。このフィルムの複製が上越市立高田図書館におかれている。当目録は高田図書館のマイクロフィルムにより作成した。

この史料群は、およそ179冊(若干の編綴間違いや合綴、乱丁・落丁がある)の縦帳で、大部分は、弘化2年(1845)から明治3年(1870)のあいだに、高田藩江戸藩邸で作成された「御用留」などの日記類である。

この史料群の中に、嘉永元年(1848)の「御在城御用留」(126-13-1)から、嘉永6年((1853)の「御在府御用留」(126-25-1)がある。参勤交代によって領主が所在を変えるたびに「御在城」「御在府」と表題を変えて記録しているが、記録者は基本的に鳥居内膳と大須賀十兵衛(原田太郎兵衛)で、職名は「御用人」とある。江戸と高田を領主に従って移動しながら記録している。江戸では、神田小川町の上屋敷に在勤していた。そのほか、明治2・3年の数点をのぞいてはすべて江戸藩邸で、「御用人」またはそれに類する役職のものが執筆したものと思われる。

高田図書館所蔵の「榊原文書」には、藩庁の正式記録と考えられる膨大な「日記」「御用留」の類があり、それは藩主の動向や、幕府や他藩とのかかわりを主要なテーマとする記録であるが、ここにあげた日記類は、それとは書式や記載内容の傾向が若干異なり系統の違う日記類であることがわかる。

「御中屋敷御留守居御用留」(126-38-1・126-47-1)と「深川御下屋敷御留守居御用留」(126-49-1)・「本所御下屋敷御留守居御用留」(126-50-1)は、それぞれ表題に記された藩邸で、留守居役によって書かれたものだが、その外の日記類は、基本的に小川町の「上屋敷」で書かれたものであることが内容から分かる。

文久4年(1864)から「御用書送帳」のタイトルに変わる。内容や形式は、「御用留」も「御用書送帳」もほとんど変わりはない。「御用書送帳」は「御用」+「書き送り」で、翌日の当番へ「御用を書き送る」の意味、「御用」+「留め」の、「御用を書き留めておく」意味の「御用留」に対応する簿冊名であろう。タイトルの違いの理由はよくわからない。

いずれにしても、嘉永6年の「ペリーの来航」や安政5年の「安政の大獄」、元治元年からの「長州征伐」、慶応3年の「大政奉還」、同4年からの「戊辰戦争」など国家的な大変革期の、高田藩(主に江戸藩邸)の微細な動きを知りうる重要な史料であろう。

「御在府御用留」 鳥居内膳・大須賀十兵衛
嘉永6年(1853) 従5月 至6月

